

小・中学校における健康安全・体育的行事の課題と展望 —— 新学習指導要領における特別活動のねらいから考える ——

教育学科 山口 孝 治

抄 録

本研究は、新学習指導要領の特別活動に記されているねらいに即した健康安全・体育的行事のあり方、とりわけ、今日そのあり方が問われるようになった「組体操」を取り上げ検討することを目的とした。具体的には、組体操の歴史的経緯、事件や事故が多発した要因、組体操の教育的価値と今後のあり方について考察した。その結果、組体操は戦前から学校体育において扱われてきたものであること、ピラミッドやタワーの進化により「高さへ傾倒」する風潮が蔓延したこと等、複合的な要因が事件や事故を誘発していることが明らかになった。今後は、“教師は子どもの願いや思いをくみ取り、それをサポートしていく中で、子どもたちと共に創り上げていく組体操”といった子ども主体の活動への転換が求められるものと考えられた。

Key Words：特別活動，新学習指導要領，健康安全・体育的行事，組体操

1. 緒言

2017年3月、小・中学校において新学習指導要領が告示された。さらに、6月には解説が提示されている。これを受けて、各学校現場においては新学習指導要領に則った取組が展開されていくことになる。特別活動においても各教科の学習と同様、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、各教科との連携を図りながら、「学校全体として、児童生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育内容や時間の配分、必要な人的・物的体制の確保、教育課程の実施状況に基づく改善などを通して、教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントに努める」ことが求められる。

とりわけ、特別活動においては、「『なすことによって学ぶ』ことを方法原理とし、各学校において身に付けるべき資質・能力は何なのか、どのような学習過程を経ることにより資質・能力の向上につなげるのかということが必ずしも意識されないまま指導が行われてきたという実態も見られる」や「社会参画の意識の低さが課題となる中で、自治的能力を育むことがこれまで以上に求められていること、キャリア教育を学校教育全体で進めていく中で特別活動が果たす役割への期待が大きいこと、防災を含む安全教育や体験活動など、社会の変化や要請も視野に入れ、各教科等の学習と関連付けながら、特別活動において育成を目指す資質・能力を示す必要がある」という課題を指摘した上で、特別活動において育成することを目指す資質・能力

について、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の三つの視点を提示し、それらを踏まえて特別活動の目標及び内容を整理し、学級活動、児童会活動、クラブ活動及び学校行事を通して育成する資質・能力を明確化することの必要性を述べている。

上記の活動の中で、学校行事、とりわけ健康安全・体育的行事は子どもたちにとって好意的に認識されている活動のひとつである。新学習指導要領（小学校、特別活動編）では「心身の健全な発達や健康の保持増進、事件や事故、災害等から身を守る安全な行動や規律ある集団行動の体得、運動に親しむ態度の育成、責任感や連帯感の涵養、体力の向上などに資するようにすること」と明記されている。すなわち、心身の健全な発達や健康の保持増進を期し、その意義の理解や態度の育成、適切に判断することが求められている。

こうしたねらいを達成すべく健康安全・体育的行事を展開していくことになる。具体的には、健康診断や給食に関する意識を高めるなどの健康に関する行事、避難訓練や交通安全、防犯等の安全に関する行事、運動会や球技大会等の体育的行事が考えられる。中でも運動会や球技大会等の体育的行事は、多くの子どもたちが楽しみにしている行事であり、学校生活を振り返ったときに思い出に残るもののひとつである。

しかしながら、近年、小学校や中学校における運動会（中学校では体育大会や体育祭と呼ばれることもある）において、「組体操」^{注1)}のあり方が問題になっている。すなわち、演技中の事故の増加である。スポーツ庁が1996年度以降の記録を分析したところ、組体操による死亡事故は9件起きていたことを報告している。さらに障害が残る事故は92件で、その内訳はタワー29件、ピラミッド14件、肩車11件、倒立6件、サボテン5件と続く。ちなみに、運動会

の恒例種目で後遺症が残る事故は、騎馬戦30件、棒倒し31件、棒引き24件、ムカデ競争8件にのぼる。これらに比べても組体操の高さがわかる。こうした状況を踏まえ、2016年3月にスポーツ庁は、組体操の安全対策を進めるために、全国の各教育委員会宛てに「組体操等による事故の防止について」と題する通知を行っている。

上記の実態を受けて、大阪市や千葉県の流山市、野田市等、全面廃止に向けて動き出した自治体も存在している。しかしながら、廃止の動きに反発する声も多いと言われている。長い間、組体操が学校現場で続いてきたのにはそれなりの理由がある。クラスの団結や一体感を醸成し、子どもに達成感を与える契機になる等といった意見である。小中学校を中心に、学校関係者が感じている組体操効果と言える。

なぜ、このような事件や事故が起こってきたのか。学校現場でどのような状況にあるのか、さらにはこれからの組体操はどのようにあるべきかについて考える必要がある。

そこで本研究では、新学習指導要領（特別活動）のねらいに準じた組体操のあり方について検討することを目的とする。すなわち、①組体操について歴史的な外観を行う中で実践上の課題を明らかにする。一方で、②組体操の教育的価値について改めて考える。その上で、③新学習指導要領における位置づけを確認し、今後の方向性を提示することとする。

2. 組体操の歴史

日本で本格的に組体操が取り組まれるようになった時期は明確ではない。しかしながら、大正初期の徳島県鳴門市で行われていた記録が残っている。第一次世界大戦で捕虜になったドイツ兵1000人が徳島・鳴門の板東俘虜収容所で過ごしていた。収容所跡地に立てられた「鳴門市ドイツ館」には、ドイツ兵が行った組立体

操の写真が残されている。

大正中期には神田のYMCAで初歩的なもの
が行われており、その後、日本体育会体操学校
(現日本体育大学の前身)で本格的に取り組ま
れるようになる。特に、戦前の明治神宮国民体
育大会(現在の国民体育大会)や、朝日新聞社
の主催で行われた体操祭では組立体操がデモン
ストレーションとして披露されている。それを
観た体育教師や実際に演示をした学生によっ
て、全国の学校現場へ広まっていったと考えら
れる。

第二次世界大戦後も、国体と呼ばれる国民体
育大会の開閉開式の集団演技で、必ずといって
よいほど組体操が行われてきたのである。一
方、学校教育においては、戦後の一時期に体育
の学習指導要領に位置付けていた。例えば、
1951年に出された「中学校高等学校学習指導
要領保健体育科体育編(試案)」では、「技巧」
の運動領域において、①器械運動、②ピラミ
ッド・ビルディング、③転回運動(タンブリン
グ)、④スタントの4つの内容が示され、さら
にこれらの方法を8つの型に分けている。その
中に「組立型」があり、具体的な内容として
「肩車」「やぐら」「積み俵」「大ピラミッド」等
が例示されている(荒木, 2016)。同様の記述
は1956年版の「高等学校学習指導要領保健体
育科編」にも認められる。これには、戦前・戦
時中の体育科カリキュラムの中心を「体操」が
占めていたことから、こうした流れが残ってい
たものと考えられる。その後、スポーツ中心の
カリキュラムに変遷していく中で、「技巧」領
域の一部は「徒手体操」「器械運動」へ引き継
がれ、「組体操」に関する記述はなくなって
いった。

しかし、組立体操は運動会(体育祭)の種目
の一つとして残っていく。民舞や創作ダンスと
並ぶ表現種目として、運動会の「ハレの空間」
を作ってきた。具体的には、作品にストーリー

性をもたせて、子どもたちの創意工夫を活かせる
場面を用意し、子どもたちとともに創り上げる
ことで、自分たちで創った集団演技に誇りを
もてるような取り組みが目指されたのである。
現行の学習指導要領(体育編)では、体操に代
わる領域として「体づくり運動」領域が示され
ており、この領域で組立体操に取り組むことが
可能である。

3. なぜ、大きな事件・事故を引き起こ すことになったのか

組体操の問題が広く社会に認知されるようにな
ったきっかけは、内田(2016)によるイン
ターネットへの配信であった。彼は、2014年
の5月に自信のSNSへの投稿により、「9段ピラ
ミッド」と「10段ピラミッド」の実像を見た
こと、その映像から危険性を認識したことを記
している。その後、負傷事故の件数等を含め、
そのあり方に関する問題提起を発信し続けるこ
とにより、大きな反響を呼ぶことになった。彼
は、組体操が一体感や感動を得られるという教
育的意義を認めつつ、他方で、今日の組体操は
ピラミッドの最高段数が高等学校で11段、中
学校で10段であることを引き合いに、組み方
が巨大化・高層化していること、さらには幼稚
園で6段、小学校で9段と組み手が低年齢化し
ていることから、一体感や感動を得るにはあま
りにもリスクが大きい点を問題視している。

当初は、組体操の意義が強調され、リスクに
蓋をする議論のほうに優勢であったが、2015
年9月に大阪府八尾市の中学校における10段ピ
ラミッドの崩壊事故の動画が配信されると危機
管理の意識が広まり、緒言で述べたような行政
側の指導や自治体レベルでの対策が行われるよ
うになったのである。

こうしたピラミッドの巨大化(タワーの高層
化)に向かった背景として、西山(2016)は、
2000年頃から人間ピラミッドが、それまでの

「平面型」から「立体型」に進化したと報告している。「平面型」は、従来の俵積みのように、単純に上に積んでいく方法である。この方法では5段が限界ということが認識されていた。そこに、四角錐あるいは三角錐状に積む「立体型」ピラミッドが実施されるようになった。そして、立体型になると、段数が5段を超えて、7段が実施され、10段まで達成されるようになる。

彼はこうした挑戦は人間の限界を超えている点を指摘するとともに、教師側の問題として、「10段ピラミッドなど誰も知らない」「ピラミッドに平面型と立体型があるが、その区別がつかない人が多い」「安全対策をすれば十分であると思っている人が多い」の3点を挙げている。

また、周りの意識の変化を指摘する声もある。荒木（2016）は、組体操は元来「身体による造形美」を表出するところにその価値を見出すことができる運動であるのに、今日では、「高さ」に取って代われ、さらに高さという結果だけを追求していく風潮が生まれ、「10段はすごくて3段ではダメ」と評価される空気が蔓延してしまった点を指摘している。

表1は、武藤（2016）による組体操の重大事故の発生要因を示したものである。

これより、彼は①個の要因、②方法の要因、③環境の要因、社会的環境、④指導・管理の要因の4つを挙げ、個の要因と環境の要因については、さらに前者が2つ（身体的要因、精神・心理的要因）、後者が3つ（自然環境、人工的環境、社会的環境）に分類している。武藤の報告から、組体操の重大事故が様々な要因から発生していることがわかる。

このように、「高さ」へ傾斜する傾向、それをよしとする雰囲気、現場の教員の知識や指導技術の不足、他にも子どもの体力の低下等、様々な要因が複合的に絡み合っていることだと考えられる。教師や社会がこうした認識を共有することが大切である。

4. 高さを追求することの危険性

組体操の最大の問題点は、負傷事故が多く発生していることである。2015年度の小学校における体育的活動中の種目別の負傷事故件数（部活動を除く）によると、組体操は、跳び箱とバスケットボールに次いで、3番目に多いこ

表1. 組体操の重大事故の発生要因（武藤，2016より）

(1) 個の要因（児童生徒の要因）	
A.	身体的要因：体型・体格，体力・運動能力，健康度，疾病・障害の有無，運動習慣，生活習慣，スポーツ歴等
B.	精神・心理的要因：性格，意欲，興味・関心，不安・恐怖心等
(2) 方法の要因（組立体操の方法の要因）	
	段の数・高さ・幅等の条件，手・足の位置，姿勢，隣同士の補助の方法等
(3) 環境の要因	
A.	自然環境：季節，天候等
B.	人工的環境：児童生徒の帽子・服装・着衣，靴の状況，安全マットの設置，校庭の状況等
C.	社会的環境：保護者・地域住民・社会からの関心・注目・期待・懸念等
(4) 指導・管理の要因	
	指導方法・内容（個別的指導・段階的指導，課題の設定，練習期間と計画等）
	教師の組体操に関する経験・知識・技術の度合い，安全配慮，人員配置等

とが明らかにされた。しかしながら、跳び箱やバスケットボールは、全国の学校で低学年から高学年まで複数の学年にまたがって実施されているのに対して、組体操は6年生を中心とした高学年に特化されることが多いこと、また必ずしも全国で行われているわけではないことを踏まえると、その事故率の高さはかなり高くなると推察される。

内田（2017）は、巨大な組体操の危険性について、小学校高学年（5・6年生）と中学2・3年生、高校2・3年生を対象に、その高さと同負荷量から検討している。表2は、先述した「立体型」ピラミッドにおいて、一人あたりの負荷量をもっとも大きくなる箇所の具体的な重さを推計したものである。

これより、頂点である1段目の負荷は、上から2段目の子どもの背中に0.5人分ずつかかっていく。さらにその下、3段目の子どもについては、正面から見て左端に位置する場合には、2段目左側の子どもの右腕にかかる負荷が、背中に乗ってくる。すなわち、（1段目の0.5人分

+ 2段目左側の1人分） $\times 1/2 \times 0.3 = 0.225$ 人分が、3段目の子どもの背中にかかる負荷量となる。このようにして計算を続けていくと、最大負荷量は土台の前列にかかるのではなく、後列の方にかかることがわかる。一人あたりの最大負荷は、7段では2.4人分、10段では3.9人分に達するのである。

上記内田と同様に、西山（2016）も「平面型」と「立体型」で、段毎に一人ひとりにかかる負荷量の計算方法及びその結果を詳述している。その中で、人間は最大負荷量4人分を絶対に超えることができないこと、さらにこれは成人男性の想定でありこれに近い負荷を小中学生に求めていることの危険性を指摘している。

10段のピラミッドは極端だとしても、高さが4～5m、負荷が100kgを超えるような組み方は、珍しくない。このように高さを求めることで、それに付随する危険性と実際に事故が起きたときに子どもたちにかかる負担を再認識する必要があるだろう。

表2. 立体型ピラミッドの負荷量（内田，2017より）

学年・性別	小学5年 男子	小学5年 女子	小学6年 男子	小学6年 女子	中学2年 男子	中学3年 男子	高校2年 男子	高校3年 男子	土台の 最大負荷 量（人）	総人数
平均体重（kg）	34.3	34.0	38.3	39.0	48.8	54.0	61.0	62.8		
1 段	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
2 段	17.2	17.0	19.2	19.5	24.4	27.0	30.5	31.4	0.50	3
3 段	15.4	15.3	17.2	17.6	22.0	24.3	27.5	28.3	0.45	6
4 段	36.0	35.7	40.2	41.0	51.2	56.7	64.1	65.9	1.05	13
5 段	50.8	50.3	56.7	57.7	72.2	79.9	90.3	92.9	1.48	22
6 段	59.0	58.5	65.9	67.1	83.9	92.9	104.9	108.0	1.72	37
7 段	82.7	81.9	92.3	94.0	117.6	130.1	147.0	151.3	2.41	55
8 段	96.0	95.2	107.2	109.2	136.6	151.2	170.8	175.8	2.80	81
9 段	105.6	104.7	118.0	120.1	150.3	166.3	187.9	193.4	3.08	111
10 段	132.1	130.9	147.5	150.2	187.9	207.9	234.9	241.8	3.85	151
11 段	144.1	142.8	160.9	163.8	205.0	226.8	256.2	263.8	4.20	196

網掛け箇所は、2014年時点の各学校段階における最高到達段数。

基本的な組み方のもとで、腕：足＝3：7で負荷量が分散するという前提で、各学年の平均体重（文部科学省「平成25年度学校保健統計調査」）を参照して算出。

5. 組体操の教育的価値

これまで、組体操の歴史や今日の事件・事故が多数認められるようになった背景とその危険性についてみてきた。ここでは、改めて「組体操の教育的価値はどこにあるのか」について考える。

まず、組体操が有する他の運動領域とは異なる教材としての価値についてである。濱田（1996）は、「組立体操は、単なる記録の進歩や勝敗に一喜一憂するスポーツ的領域と違って、表現的身体活動の一翼と見ることができる。互いの健康な身体を組み合わせ、あるいは積み上げて、そこに一つの身体による造形を試みて美の共同感ともいうべき醍醐味にひたる運動」であると押さえ、表現運動としての魅力を唱えている。その上で、「バランスがとれている形は美しい。安定した形をつくり、それを安全につなげなければならない。それが体育としての組立体操であるべき」とする取り組み方の方向性も示している。

次に、体力的側面や情緒的側面からの効果の指摘が認められる。すなわち、荒木（2017）は、組体操の教育的価値について以下のように述べている。

安全を確保するために、土台の人の「大丈夫！しっかり支えているよ」、上に乗る人の「楽に支えられるように乗るね」といった互いの安全を思い合うことが不可欠であり、組立体操には身体を通した安全教育としての側面が見出せる。また、互いが身体力を貸し合う、すなわち身体を介した信頼関係の構築が考えられる。さらには、身をゆだねる、支えるための大きな集中力が求められる。

体力の観点からいえば、全身の力を緊張させたまま制止することから静的な筋力を高めることにもつながる。成長期の子どもが組立

体操に取り組むことで、身体の調整能力を発達させることもできる。不安定なところでバランスをとったり相手と体重を支え合ったりすることで、筋の感覚器から脳に情報が伝達され、その情報を元に脳は筋を収縮させる。その繰り返しで微妙な筋の調整能力を発達させることができるのである。

このように、彼は組体操が有する安全教育教材としての価値、子どもたちの情緒的側面、体力的側面とりわけ生理学的効果についての価値を指摘している。さらに、合理的指導を通して上記が達成されたときに「身体による造形美」「美の共同感」という組体操の究極の教育的価値が実現し、学校教育で扱う教育的意義を望むと押さえている。

こうした、荒木の指摘と呼応するように、組体操には特有の学びの「空間」があり、それらが多様に教育的効果を醸成しているとする見解も認められる。

小川（2011）は、組体操には、一人では成し遂げられない暗黙の了解が存在しており、子どもたちが、共に協力し合い、組体操を創り上げて行くこの暗黙の了解が存在する空間を「共創空間」と称し、その教育的効果を検証している。その結果、組体操を通して「子どもたち同士のかかわり」「教師と子どもたちとのかかわり」「第三者とのかかわり」に変容が認められたこと、その背景に「共創空間」が影響を及ぼしていたことを推察している。

こうした組体操の教育的価値は、各学校現場において、当初は広く認識され受け継がれてきたものと考ええる。それが、上述したピラミッドやタワーの進化に伴い、少しずつ薄れてきたものと考えられる。今一度、上記の点を再認識し、子どもたちの目線から取り組みを進めることが必要であると考ええる。

6. 今後に向けて

これまで、組体操の歴史的経緯や今日の事件・事故の多発に認められる危険性ととも、その教育的価値について再考してきた。これらを踏まえ、今後の組体操の考え方、行い方について検討する。

まず、組体操そのものの位置づけである。これまで組体操は、運動会や体育祭の時だけの出し物（エキシビジョン）的な要素が表出しすぎたきらいがあった。現実的には、あいまいな計画のもと、短期集中型で子どもたちを追い込むスタイルの指導が少なからず存在している。こうした取り組みは危険極まりない。そこで、日常の体育学習の成果を発揮する場として運動会（体育祭）で披露するという流れの構築である。

現行の小学校学習指導要領体育編や新小学校学習指導要領体育編の中で、「組体操」という文言は見当たらない。しかしながら、学習指導要領に記載がないからといって、「組体操」と体育科の内容が全く無縁であるというわけではない。「体づくり運動」の教材の一つとして位置づけることは十分可能である。現行の学習指導要領解説体育編（2008）や指導資料には、体づくり運動のねらいに応じた運動が例示されている。

例えば、小学校高学年と中学・高校段階の「力強い動きを高めるための運動」として「自己の体重、人や物などの抵抗を負荷として、それらを動かしたり、移動したりする」ことである。これらは、人と組んで実施する運動であり、組体操のバリエーションの一つとして理解できる（長谷川、2016）。また、体ほぐしの運動に関する資料の理論編では、「単に、みんなと動いて楽しいとか、汗をかくと気持ちがよいということだけでなく、協力や助け合いが必要となる運動、互いに声を掛け合わなければ進めることができない運動、仲間のよさが自然に分かつ

てくるような運動を選んで行うようにするなどの工夫が考えられます」と記されており、グループでの組体操が示されている。

このように、体づくり運動で取り上げた協力的な学習内容を、単に動きの体験に終わらせることなく、その学習成果を運動会や体育祭などの場で発表できるような可能性を模索していきたい。

次に、教師の組体操に対する認識の問題である。この点について、濱田（1996）は、「組立体操の約束」として次のように述べている。

人体は純粋物理学の対象にはならない—組立は物理的に合理性を持たなければならない。しかし、人体は建築材料のように純粋物理学の対象にはならない。全員の体重を計量したからうまくいくというものではない。同じ50kgの体重の人でも、筋肉質で強固な人もいれば脂肪肥りで虚弱な体質の人もいる。同じ身長の人でも柔軟性や巧み性、気持ちの持ち方、すなわち、精神的な差異もあるから、身長や体重はいちおうの目安になるが万全ではない。したがって、指導者は総合的な体力や経験をもとにして計算すべきである。

山高さが故に尊からず—組立体操ではその構成のよさ、素材の生かし方（発育段階、性別）、形のもつリズムや重点の指向、適材適所の協調組立、解体の手順のよさ、練習の成果などを評価の対象にすべきである。組立の速さ、持続、高さなどを競う競技ではない。意外性だけを追求したり奇をてらったりして競技に持ちこむことは危険であり、組立体操の邪道である。

濱田の指摘は、今日の組体操の「高さへの傾倒」という風潮に対する批判とともに教師の正しい認識を促すものである。

「リスク回避」の視点からの提言も認められる。内田（2015）は、「教育現場で『ゼロリスク』は夢物語であり、大事なものは、仮にリスクが大きいものがあるとするならば、それをゼロにするのではなく、低減させることである」と述べている。

今日いくつかの自治体は、安全な組体操のあり方を探ろうと、動きを見せている。しかしながら、それは現実的な安全確保というよりは、極論（全廃）と極論（巨大組体操）の間に落ち着くような政治的決着をとっているようにみえる。例えば、「ピラミッドは5段、タワーは3段まで」というよくありがちな規制は、巨大すぎずまた全廃でもないという決着である。だが、事故の事例や統計を読み解く限りは、とくにタワー3段というのはまったくもって危険な水準にあるといえる。「やめる－やめない」という二者択一ではなく、また、両極の間の政治的決着でもなく、組体操の危険性と可能性を直視しながら、「安全な組体操」のあり方を模索していくことが求められている（内田，2015）。

このように、教師の認識や取り組み方の改善が求められるところである。一方で、これまでどちらかというと組体操は教師主導で実施されることの多い取り組みであった。これからは、子どもたちが考え、主体的に取り組む組体操の在り方も考えていきたい。

この点について、2017年6月に公示された「小学校学習指導要領解説特別活動編」によると、健康安全・体育的行事の実施上の留意点として5点挙げている。その中で、運動会等においては以下の3点が関連する。

ウ 運動会については、実施に至るまでの指導の過程を大切にするとともに、体育科の学習内容と関連を図るなど時間の配当にも留意することが大切である。また、活発な身体活動を伴う行事の実施に当たっては、

児童の健康や安全には特に留意し、日常の学校や家庭における健康管理、教師間の協力体制を万全にし、事故防止に努める必要がある。

エ 運動会においては、学校の特色や伝統を生かすことも大切である。ただし、児童以外の参加種目を設ける場合は、運動会の教育的意義を損なわない範囲にとどめるよう配慮する。また、児童会活動やクラブ活動などの組織を生かした運営を考慮し、児童自身のものとして実施することが大切である。その場合、児童に過度の負担を与えたり、過大な責任を負わせたりすることのないように配慮する。

オ 各種の競技会などの実施に当たっては、いたずらに勝負にこだわることなく、また、一部の児童の活動にならないように配慮することが必要である。

これより、取り組みの過程が重視されていること、子どもたちの主体的な活動をねらっていることが読み取れる。今後は、“教師は子どもの願いや思いをくみ取り、それをサポートしていく中で、子どもたちと共に創り上げていく組体操”が多く見られることに期待したい。

こうした、取り組みを実現可能なものにする観点として、三宅（2017）の提言が認められる。彼は、今日の組体操が「高さへ傾倒」していることへの危惧とともに、表現美としての組体操を実現させる具体的な活動のポイントを例示している。

彼によると、「組体操」を実施するにあたり、「演技内容をどう構成するか」と「見栄えのよい技の組合せにするには」の2つの観点から指導の効果的なポイントを述べている。前者は、①いくつかの種目を入れればよいのか、②子どもたちの体格や体力に応じた技を実施させる、③子どもたちの意見を取り入れて一緒に作りあげ

ていくといった3点を挙げ、各点における留意点を詳述している。同様に、後者についても、①全員が同じ技を行わなくてもよい、難易度の異なる組立技をいくつか用意する、②「組運動」を演技に入れて、動きのある作品にする、③隊形次第で見せ方が変わる、④高低差をつけて立体的な作品に、⑤演技の最初には準備体操としての動きを入れ、中盤にウェーブを入れてみる、⑥だんだん盛り上がるように技を組み合わせていく、⑦テーマに沿った構成の仕方といった7点を挙げている。

以上より、今後の組体操は、「高さへの傾倒」を取り除き、その教育的価値を再認識する中で、子どもたち主体の取り組みを模索していくことが望まれる。そうした取り組みから子どもたち自身に安全に関する意識が涵養されていくのではないだろうか。それこそが、健康安全・体育的行事のねらいに即した取り組みになると考える。

注

厳密に述べると、「組体操」と「組立体操」は、性格もねらいも異なる運動である。「組体操」は、パートナー・エクササイズ (partner exercise) とかペア・ジムナスティクス (pair gymnastics) と呼ばれ、2人以上で互いの力を利用し合って動く、動的な運動である。たえず相手の体や動きを考慮せざるを得ず、その過程で相手の長所や短所を認識でき、同時に自分の特徴も認識できる。すなわち、助け合いと触れ合いが基盤になって行われる運動である。

これに対して、「組立体操」は、スタント・ピラミッド (Stunts Pyramid) とかピラミッド・ビルディング (Pyramid building) と呼ばれ、人間を2段、3段と積み上げて造形美を表現する、静的な運動形態をとる。体育的效果を期待するだけでなく、ピラミッドのようなモニュメントや自然界の景勝など、空間に互いの意図する造形を構築し、美の共同感ともいえるべき雰囲気味わうものである (荒木, 2016)。例えば、

スペインのカタルーニャ州で200年以上続く伝統的な風物に「カステイ (castell)」と呼ばれる人間の塔 (人間タワー) がある。ユネスコの無形文化遺産にも登録されている (谷口, 2016)。

上記より、両者を分けて考える必要があるが、学校現場ではこれらの運動は広く「組体操」と呼ばれている。本稿においてはこうした実情を鑑み、「組体操」と「組立体操」を併せて「組体操」として表記する。

<参考文献>

- 荒木達雄 (2016) 「組体操・組立体操の歴史と教育的価値－濱田靖一の思想に学ぶ」体育科教育第64巻第5号, pp.12-17
- 荒木達雄 (2017) 「組体操・組立体操の歴史と教育的価値－濱田靖一の思想に学ぶ」体育科教育第65巻第5号, pp.70-79
- 内田良 (2015) 「子どもと先生を苦しめる『教育リスク』」光文社新書: 東京
- 内田良 (2016) 「組体操・組立体操リスクの『見える化』活動－ネット空間における議論の成果と今後の展望」体育科教育第64巻第5号, pp.18-21
- 内田良 (2017) 「教育活動におけるリスクの不可視性～組み体操の負傷事故に関する考察～」外来小児科第20巻第1号, pp.33-37
- 小川茂 (2011) 「組体操の『共創空間』が生み出す教育的価値」教育実践研究第21集, pp.185-190
- 谷口輝世子 (2016) 「世界の組体操を見てみたら」体育科教育第64巻第5号, pp.30-33
- 西山豊 (2016) 「組体操・人間ピラミッドの巨大化を考える」数学文化第25巻, pp.12-35
- 長谷川聖修 (2016) 「組体操・組立体操と体づくり運動との連携を図る」体育科教育第64巻第8号, pp.54-56
- 濱田靖一 (1996) 「イラストで見る組体操・組立体操」大修館書店: 東京, P.232
- 濱田靖一 (1998) 「イラストと写真で見るマスメディア」大修館書店: 東京
- 三宅良輔 (2017) 「演技の構成ポイント」体育科教育第65巻第5号, pp.84-91
- 武藤芳照 (2016) 「子どものからだから分析する事故の背景」体育科教育第64巻第8号, pp.38-41
- スポーツ庁 (2016) 「組体操等による事故の防止について」
- 文部省 (1951) 「中学校高等学校学習指導要領保健体

- 育科体育編（試案）」
- 文部省（1956）「高等学校学習指導要領保健体育科編」
- 文部科学省（2008）「小学校学習指導要領体育編」
- 文部科学省（2008）「中学校学習指導要領保健体育編」
- 文部科学省（2012）「学校体育実技指導資料集第7集『体づくり運動』授業の考え方と進め方（改訂版）」東洋館出版社
- 文部科学省（2017）「小学校学習指導要領解説特別活動編」
- 文部科学省（2017）「中学校学習指導要領解説特別活動編」